

## ルドン ひらかれた夢—幻想の世紀末から現代へ

ポーラ美術館(箱根・仙石原) 2018.07.22~12.02



「オディロン・ルドン」(1840~1916)は、印象派の画家たちと同世代であるが、作風は大きく異なって光の効果を追求しもっぱら**幻想の世界**を描き続けたフランスの画家である。彼は19世紀後半~20世紀初頭の西洋絵画の歴史の最も大きな転換期にあって、独自の道を歩んだ“孤独の画家”であるといわれている。

晩年の作品は、油彩、水彩、パステルの何れも色彩表現に優れて、特に「花瓶に挿した花」を鮮烈な色彩で描いた「一連のパステル画」が知られている。

本展は、これまで築き上げられてきた孤独の幻想画家の芸術家神話を解き明かし、幻想や神秘の世界を追い求める現代作家との比較を通して、画伯「ルドン」の生み出した芸術の今日的な意義を検証している。

### 《日本風の花瓶》 1908年 油彩/カンヴァス

晩年になると“花瓶に生けた花”を繰り返し描いたが、何れも現実のものとはかけ離れているのは、花は華麗な色彩の幻想を生み出すきっかけに過ぎず、花々の色彩は空間へと変貌していくとし、発色は輝かしくて官能性に神秘性を表現するためには最適な題材であるとしている。

### 《イカロス》 1890年頃 油彩/紙(カンヴァスに貼付)



翼のある人物をいくつかの作品として描いているが、本作品は“**鮮やかなオレンジ色の翼のある人物が両手で何か捧げ物を持っている姿**”である。ギリシャ神話に登場する「イカロス」の父「ダイダロス」は、クレタ島の「ミノス王」のために迷宮を造った大工の名工であったが、後に「ミノス王」の不興を買い、息子「イカロス」とともに塔に幽閉された。二人は塔を抜け出すために、鳥の羽を集めてロウで固めた大きな翼を背中につけて脱出を図る……。

### <展覧会の見どころ>

1. 「孤独の画家」の幻想の源泉を探り、謎に包まれたルドン像を明らかに！
2. 国内の「ルドン」コレクション「101点」を展示、技法材料の調査も！
3. 「鴻池朋子」などの現代美術から、「岩明均」などのマンガの世界まで。現代に息づく「ルドン」的な幻想世界を紹介！